

雨源テレイ

小橋 博史



中日新聞本社

レイト涙雨

昭和五十七年三月十日初版
昭和五十七年四月二十二日再版
定価 一、二〇〇円

著者 小橋博史

発行者 青木茂

発行所 中日新聞本社

〒460

名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
電話名古屋(052)

201-8811番
振替名古屋9-10番

印刷所 大日本印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替えます。

© HIROSHI KOBASHI 1982

4707

レイテ
涙雨
目次

米大艦隊レイテ湾に	9
上陸米軍と交戦の第十六師団	13
砲爆撃のあと米軍上陸	16
第十四方面軍と第三十五軍	20
男の負い目	23
北満から第一師団南下	27
レイテ戦の情報不足	29
連隊旗を焼いて玉砕の第三十三連隊	31
第十六師団孤立	34
増援部隊続々と上陸	39
揚陸の日本軍反撃を開始	42

第二十六師団の総攻撃	49
陣地を撤収、後退	54
包囲網縮める米軍	58
運命の百六発目	62
飛行場特攻とその終末	67
落下傘部隊降下す	75
飛行場制圧もつかの間	80
オルモック血戦	84
新鋭銃に驚く米軍	88
日米携帯食料の違い	92
リモン峠の血戦	96
非戦闘部隊の嘆き	100
独歩第十一連隊第二大隊全滅	104
悲運の静岡独歩第十三連隊	108

傷つき捕われ収容所へ	111
ついに遊兵となる	116
友軍の白骨死体も	120
退却命令に浮き足立つ	125
レイテ戦これまでの経過	129
七人の証言者	133
セブ島への脱出	137
ルソン島の戦い	141
PW1118番	150
白骨街道を越えて	154
米兵の日本語教授に	157
捕虜の心の痛み	162
歓喜峰の最後、レイテ戦終わる	166
帰国、母と涙の再会	170

書き綴ったレイテ戦記	173
遺族の執念	177
泉会の結成へ	181
慰霊碑を建立	185
生き残った者の苦しみ	188
新編成でレイテへ	192
原隊に思いを馳せて	195
レイテの遺骨収集始まる	199
戦跡巡拝の旅	203
第十六師団関係の戦友会	213
兄戦死のレイテに石地蔵	216
曙光新聞の復刊	220
妻の戦争は終わった	224

まえがき

昭和十九年十月二十日、約七百三十隻の艦船で送り込まれた二十五万七千余人（最大時）の米軍と千五百機の飛行機がフィリピン・レイテ島の日本軍に襲いかかった。ハワイ真珠湾攻撃で華々しく緒戦を飾り、マレー、比島、インドネシア、ニューギニア方面まで占領した日本軍も、翌十七年から米軍の反攻に遭い、次第に守勢に回り、レイテ島へ米軍が反攻してきた時点では、戦力も残り少なかった。海軍の艦艇、飛行機が底をついていた。「ルソン島を決戦場に」という現地軍司令部と「いまこそ、レイテで敵を撃滅」という南方総軍や大本營の意見の違いの中で、レイテへぞくぞくと増援部隊が送り込まれた。

レイテを守っていたのは、京都の第十六師団（垣）ほか一万八千人。そこへ、東京の第一師団（玉）、愛知、岐阜、静岡三県出身者で構成する第二十六師団（泉）

を中国大陆から、第百二師団（抜）第六十八旅団（星）独歩第三百六十四大隊（野尻）第四十一連隊（第三十師団）それに天兵大隊、独混第五十八旅団、戦車第六連隊、十連隊の一部、海軍陸戦隊などをミンダナオ、セブその他から送り込んだ。その数約七万五千人。

米軍は艦砲、空爆でみるみるレイテの島の形を変え、日本軍を圧倒した。日本軍の戦死者七万九千人。生き残った人は数えるほどしかない悲惨な戦いであった。

その生き残りの人々から、一つ一つ、証言を得て、中日新聞に連載した「レイテ涙雨——戦後三十七年目の証言」にその後の史料を加筆し、まとめたのがこの一冊である。小さな、南の島で息子を、父を、夫を、兄を失った数多くの遺族とともに、生き残った人も、戦後三十八年、ずっとこの島にとりつかれてしまっているほど悲しく痛ましい戦いだったのである。

昭和五十七年二月

本書に登場する主な郷土部隊

第二十六師団（通称泉）

独立歩兵第十一連隊（泉五三一四部隊）

本文中の略称

独歩第十一連隊（または第十一連隊）|| 愛知県

独立歩兵第十二連隊（泉五三一五部隊）

||

独歩第十二連隊（または第十二連隊）|| 岐阜県

独立歩兵第十三連隊（泉五三一六部隊）

||

独歩第十三連隊（または第十三連隊）|| 静岡県

独立野砲兵第十一連隊（泉五三一八部隊）

||

野砲兵第十一連隊

工兵第二十六連隊（泉五三一九部隊）

第二十六師団通信隊（泉五三二〇部隊）

輜重兵第二十六連隊（泉五三二一部隊）

第二十六師団兵器勤務隊（泉五三二二部隊）

第二十六師団野戦病院（泉五三二四部隊）

第二十六師団病馬廠（泉五三二六部隊）

第十六師団（通称垣）

歩兵第三十三連隊（垣六五五六部隊）

||

第三十三連隊

|| 三重県

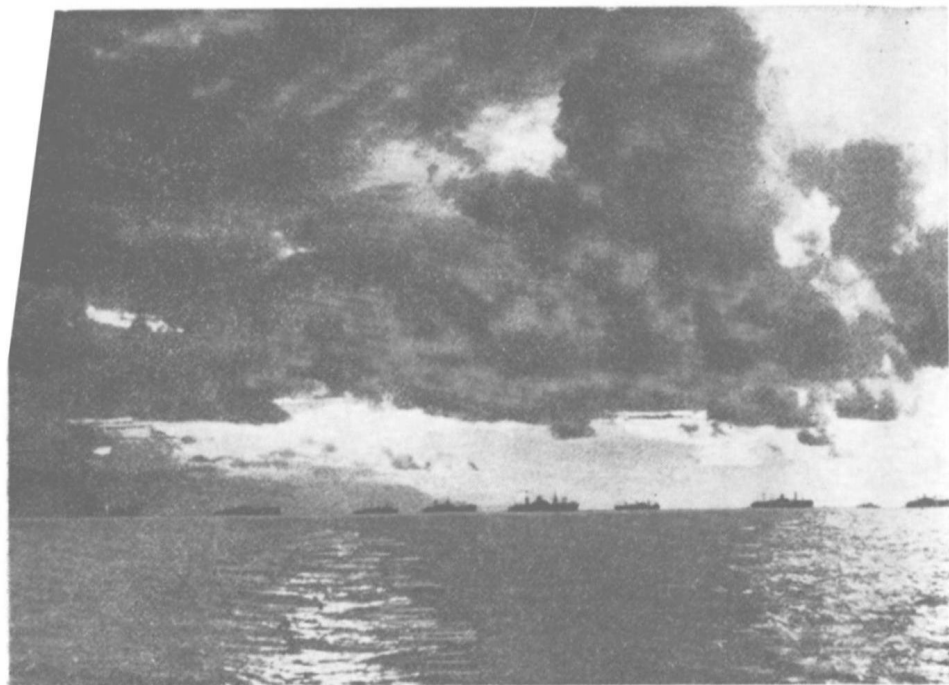
・敬称は全て略させて頂きました

米大艦隊レイテ湾に

昭和十九年十月のはじめ、レイテ島タクロバン飛行場へ、日本軍輸送機が一機着陸した。降り立ったのは、マニラに本部を持つ第十航空情報連隊の一個小隊であった。一個小隊といっても、地上無線機二、兵員三十人足らずの小部隊である。

愛知県宝飯郡御津町赤根出身の鈴木正一一等兵も、この中にいた。飛行場から、タクロバンの市街を抜け、タナウアンという村落まで南下し、そこから山に向かって西進した。タクロバンは、あと、十日ほどでレイテの最初の戦場になるところだが、東海岸の北端にある。目の前にサマル島が見える。

鈴木一等兵たちは、トラックで第十六師団（通称垣）後方陣地のあるダガミに着き、着任の申告をした。十月十日、一個小隊が三つに分かれ、鈴木一等兵は多田伍長（大阪府出身）の指揮下に入り、合計七人で、アブヨグというところへゆけと命ぜられた。アブヨグは、タクロバンから南へ約六十キロほど下がった村である。



敵艦隊発見せり 鈴木正一等兵が見た米軍の艦船 (米陸軍提供)

いたとき、上司と衝突したからである。

二十八歳の鈴木一等兵は、このあと一週間、そこそ涼しい海の風を浴び、水牛をながめ、ヤシの実を採って、平和を満喫する。レイテはゲリラの巣だと言われてきたが、この付近にはそんな気配は少しもない。十八日朝も、曇り空ながら、平和な夜が明けた。鈴木一等兵は大きく伸びをして、海をながめた。

「?.....」

目をこらした。沖合はるかに、いくつも黒い点が見える。

「敵……」

と、とっさに思った。なおも目をこ

らずと、それはまさしく米軍の艦船だった。

「敵だ、敵の軍艦だ」

と、鈴木一等兵は叫び、だれかが、ドラグの前線本部を呼び出し「敵艦発見、アブヨグ前面の海を埋めるごとし」と打電した。

海も陸も、まだ、しーんとしていた。前線本部から「貴隊の報告が第一報である」と返電がきた。鈴木一等兵は「おれが第一発見者か」と、一応満足したが、あと、どういうことが起きるのか、さっぱりわからなかった。米軍がレイテを目指して上陸してくるなど、そのころ、在比日本軍は考えてもいなかった。くるなら、ミンダナオだ、というのが常識だった。

したがって、米軍の通過部隊ともとれるのである。鈴木一等兵はちよっぴり落ち着いた。三十分か一時間くらい横になっていたような気がする。と、突然、海がごうごうと唸りを上げた。各艦船のあちこちに、チカチカと火がはじけ、煙が上がった。つぎに空がいくつにも裂けた。レイテの東海岸一帯に艦砲が撃ち込まれ始めたのだ。大地が揺れた。アブヨグの無線基地も例外ではない。ごう音と共に、砂が木が空へ飛んだ。

鈴木一等兵は、夢中でタコツボと呼ぶ穴の中に身を伏せた。

「ドラグへこいと前線本部が指示しています」

無線を聞いていた通信兵が叫んだ。「こいといったって、こんなんじゃ、ゆけやせんがア」

と、鈴木一等兵は穴の中でふてくされた。

艦砲射撃がやむと、こんどは、小型機が大編隊でやってきた。グラマンだ。爆撃、銃撃を繰り返す。「無線機解体！」と多田伍長が叫ぶ。そして、「ドラグへ帰るぞ」といった。

艦砲射撃、爆撃のすき間を縫って、ドラグへゆこうというのだ。無線機、発電機など器具をそれぞれが背負って基地を出る。米艦船を発見して、どれだけの時間がたったのかわからない。アブヨグからドラグまで二十五キロほどだ。身を伏せ、歩き、また、身を伏せて歩いた。ダキタン川を渡ったところ、夕暮れが近づいていた。

米軍は、まだ、上陸する気配はないが、砲煙のすき間から見える米艦船の数が多くなったようだ。

七人の下士官、兵がドラグに着いたのは午後七時ごろだった。

上陸米軍と交戦の第十六師団

翌十九日、米艦船がレイテ湾を埋め尽くした。その数、四百八十二隻。狭い湾内が真っ黒に

瞬時に姿を変えた。

レイテ島は、この時点、第十六師団（京都）が主力であった。ほかに船舶部隊、航空部隊な



第三十三連隊長鈴木辰之助大佐



第十六師団長牧野四郎中將

なるほどのおびただしい艦船である。そして、その艦艇から、無数の砲弾、ロケット弾が日本軍陣地、波うち際へ撃ち込まれ始めた。

ミンダナオ島上陸を目指す米軍の通過部隊が、単に、通りすぎりの一撃をレイテへ浴びせたと思っていたレイテの日本軍は、ふくれ上がる無数の艦船、砲撃で、はじめて「レイテ上陸！」と気付いた。折から、この付近は台風圏内に入り、時折、風雨が激しくなっていた。

しかし、台風接近に気付く者は、だれ一人としていなかった。タクロパンの基地、パロ、ドラグ、サンタフェの基地もみるみる砲煙の中に姿を消していった。空も海も大地も、ごうごうと音を立て、赤い炎を噴き上げ、東海岸に近い山々は、